
お馬鹿な二人のトキメキ妄想パラダイス☆

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お馬鹿な二人のトキメキ妄想パラダイス☆

【Nコード】

N7610B

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

お馬鹿で阿呆でヘタレの啓太が恋をした相手は5歳も歳上の妄想少女ゆり。彼の告白にゆりは妄想を繰り広げて、話が進まない。馬鹿らしい恋愛。名付けて恋愛。さあ、彼らと共に妄想の世界へレッツゴー♪

びらびらのドレス。にっこりと笑って待っていれば、必ず貴方はやってくる。

私の理想の王子様………きゃ☆

恋をした。いつもロリータ的な服を着こなす歳上の女の子。びらびらな白くてピンクな服を。不思議なことにすごく似合っている。いつもふわふわとした可愛らしいその笑顔がとても好きになりました。

ここに恋する中1のお馬鹿で阿呆でヘタレの男がいた。彼は今、歳上の女性に恋をした。その女性は高3の妄想少女。だが、2人は互いに何も知らない。

今日こそ話しかけるぞ！

意を決してお馬鹿な男、佐藤 啓太は彼女に近づいた。今日も白くてピンクな服を着こなす彼女は日傘をさして、静かに歩いていた。

「あの……………」

「あら、貴方よく私のこと見てた中学生ですよね？」

いきなり知られていたことに心臓が爆発した。くっきりとした目元と、綺麗な輪郭、桃色の唇をした美人な女性。可愛くて、知られていて、緊張して、もう何が何だかわからない。

「どうしたの？」

「すすすすす、好きなんです！僕と付き合ってください！」

話すだけの出会いが何故か告白になってしまった。きょとんとした顔で啓太を見ていた彼女は顔を輝かせた。

告白。何ていい響き。私もいつかはこの子のような純粋な彼を――
――。

ああ、早く私の運命の人よ私をさらいにきて。

私は貴方に愛をそそぎ、身体も、全て上げちゃうわ☆きやあ！

私を抱き抱える大きな手、低い声音、見つめるその瞳。

もう、たままないわあ☆

トリップした。ある意味怖いその想像力、いや、妄想力は見事に告

白した啓太のことを忘れていた。うつとりと頬を染める彼女に啓太は口をポカンと開けて。

もしかして、これはOKなのか？こんなに顔を染めて、メツチャ可愛いんだけど…………。

ぐう、だけど待つんだ。これで違ったら俺はただの変態だ。

お馬鹿はお馬鹿なりに自分の気持ちを抑えて、気長に答えを待つ。だが、彼女は未だに妄想の世界から戻って来ない。

2回目のデートは海。

3回目にキス。これは基本よねえ。

4回目は街中デート。服の着せ合いっこするの。

5回目は自宅に……………きや☆

馬鹿だ。そろそろ我慢の限界になり始めた啓太はもう一度口を開いた。

「あの、返事は？」

「えっ？何が？あつ、そういえば自己紹介まだでしたね。私は白鳥ゆり。よろしくお願いします」

「へっ？えっ、あ、はい」

初めて聞いた彼女の名前は外見に似合う可愛らしいもので。告白は通じなかったが、名前を聞けただけでもいいとしようとか自分を説得したのだった。

2人は無言で何故か歩く。

「あ、あ、あ、貴方は好きな人は………?」

「まだ来てくれないの。いつかきつと私を連れに来てくれるのだけど」

「は? えっと、それはいるってことですか?」

「違うわ。いるっていうよりも現われるってことよ」

訳がわからない。同じ馬鹿でも種類が違い過ぎて話がかみあっていない。頑張って理解しようと悩む啓太と、また妄想の世界にトリップしたゆり。ある意味お似合いのカップルだ。

「早く私をさらいにきて」

瞳を輝かせて理解不能な言葉を吐く彼女に、啓太はやっと悟った。この人は自分を見ていないと。何だか虚しくなり、静かに涙を流した。

その日、妄想の世界に入ったままの彼女と別れを告げて、彼はこの恋を諦めようと心に誓った。

とぼとぼと中学の帰り道を歩く啓太。諦めようと誓ったその恋はなかなか止められず、だがまた彼女に会う勇氣はなかった。ふと、この前話した場所に視線を送ると純白のひらひら服を着たゆりが見えた。

どきん、と懲りずにときめいた。歩いていた足はいつの間にか止まっていて、目は彼女を追っている。近づいてくるエンジン音に顔をしかめていると、彼女のすぐ後ろに彼女めがけて車が突っ込んでき

「あああああ！！！！あぶなあい！！！」

お馬鹿は頭よりも身体が勝手に動く。この時はそれで正解。啓太はぼーっとするゆりの身体を腕におさめて、倒れこんだ。ぎりぎり車は横をかすめていき、啓太は安堵の溜め息をついた。

「だ、大丈夫ですか？」

ぼーっと啓太を見つめるゆりは何の反応もない。どこか傷めたのかと焦る啓太をよそにまた彼女はあの世界へレッツゴー！

いい。私を力強く抱きしめたこの身体。

危険を顧みず守ってくれたこの勇気。

ああ。この人こそ私の求めていた、お・う・じ・さ・ま☆

熱い視線に啓太はお馬鹿だから気付かない。ただ、腕の中にいつまでも彼女をおさめているというこの状況に理性を失いかけていた。そして、彼女の顔が今までにないほど近づいている。

「あ、あの」

「貴方のお名前は？」

「え？佐藤 啓太です」

「啓太様☆やっと会えたわ。私の王子様」

勝手に1人で盛り上がって啓太に抱きついた。思いがけない行動に顔を真っ赤にして慌てる。

何だ？何だ？え？もしかして襲っていいの？

都合のいい解釈。ゆりはきつく彼を抱いたまま離れようとしなない。だからだと汗を流しながらも、おそろおそろ彼は彼女の背中に手を回した。

「あの、僕と付き合ってもらえますか？」

「もちろんよ。私の王子様」

何だかよくわからない2人の付き合い。お馬鹿で阿呆でヘタレで妄想な2人の世界に誰も入ろうとは思わない。

この2人の関係は果たして長続きするのだろうか？

私の王子様。さあ、これから楽しいデートをやりましょう☆
私は貴方に全てを捧げますわ。

やっと手に入った彼女はちょっと理解し難い世界にいる人だけど、
やっぱり僕は彼女が可愛くて仕方ありません。
やっと手に入った彼女との甘い時間をこれから作れるぜい！！

（後書き）

えっと、馬鹿ですね。友だちが提案してきたギャグ恋愛です。気楽に、決して真剣に読まないで下さい。読んでる自分が馬鹿らしく思っ
てきますから。何気に打って面白かったので、続きを出すかもし
れません。この話を好むいい感じのノリの人は続きをかいた方が
いいのか意見を聞かせてくれると非常に助かります。
評価及び感想を気長に待っています。

三亜野雪子

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7610b/>

お馬鹿な二人のトキメキ妄想パラダイス☆

2010年10月11日00時24分発行